

学内広報

2022.12.20

no. 1565



小石川植物園のイロハモミジと温室（12月2日）



来春の朝ドラは
植物園ゆかりの
研究者の物語!

志ある卓越。



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京フォーラム2022

哲学と科学の対話

UTokyo Day 座談会

東京大学が創る50年後の未来



12月1日～2日、現代が直面する課題と未来の人類社会のあり方について話し合う「東京フォーラム 2022 Shaping the Future」が開催されました。4回目となる今回のテーマは、哲学と科学の対話。30人以上の識者が会場の安田講堂とオンライン空間に集い、議論を展開しました。2日間で14を数えたプログラムから、初日のハイレベルトークセッション「哲学と科学の対話——新しい啓蒙に向かって」で展開された対話の大意を紹介します。

中島 このセッションでは、今求められている新しい啓蒙 (new enlightenment) について4先生と考えたいと思います。

新しい啓蒙主義の三本柱とは？

ガブリエル 世界が危機的状况にある今、哲学の一分野である倫理学がこれまで以上に重要です。道徳的事実は、人間として何をなすべきかに関わるもので、共通の人間性に基づく責任の結果として生じます。倫理は人間以外の動物や自然にも向けられるべき道徳的なリアリズムだと言えます。新しい啓蒙におけるヒューマニズムは、人間中心主義ではありません。人工知能や生命科学の発展を経て人間を全ての中心とすることに意味がなくなったのです。新しい啓蒙では普遍性を多様性から捉えます。文化の違いを越えつつも、多様性を捉えた探究を行うことで初めて普遍性が獲得できます。普遍性は、以前の啓蒙の時代のように理性や生物学だけにに基づくものではありません。地域ごとの違いを捉えた上で、新しい普遍性をボトムアップで作る必要があります。リアリズム、ヒューマニズム、普遍性が、私の考える新しい啓蒙主義の三本柱です。

大栗 アッペルとハーケンは1976年にコンピュータを使って四色定理を証明し、

ボエボツキーは2013年に数学的証明をコンピュータで実行可能にし、フラットアイアン研究所のグループは今年、30年分のデータをニューラルネットワークに学習させることで万有引力の法則を再発見しました。このような発展は、人間が法則を発見するとはどういう意味なのかという問いを立てたのです。かつての啓蒙主義は、理性と観察可能な証拠を重視する科学的手法を用いれば、確証バイアスや集団思考といった傾向を修正できると考えました。その後科学が発展すると、人工の心を含む他者の心による推論に依存する必要が生じました。同時に、文明の存続に重要な影響を及ぼす問題では、科学的手法で偏見や誤った信念を正すことが難しくなっています。それらを前に、哲学者は世界を理解するための新しい社会的想像を提供できるでしょうか。

ローカルに根ざす新しい普遍性

イ かつての啓蒙は、人間は合理的で主体的な存在であると捉えました。それによって民主主義が進化した一方、世界の多様性が十分認識されていないという制約もありました。新しい啓蒙の時代には、世界各地の特性を認識し、新たな科学的発見と技術の進展を取り入れ、地球温暖

化や気候変動といった課題に、科学者と哲学者の両方で対応しないとけません。近年、ローカルなコンテンツに普遍性が現れているのが興味深いと思います。世界で人気を博した『イカゲーム』は韓国ローカルの話ですが、扱うテーマは普遍的でした。グローバルがローカルに、ローカルがグローバルになっている状況があります。ローカルに根ざす新しい普遍性が重要です。多様性と複雑性を新しい普遍性のなかでどう実現するのか。ライブニッツは「一から多へ」と言いました。普遍性は一つではなく、特定の地域や文化に各々の普遍性があります。こうした普遍性を軸にすれば、世界の人々が協力して課題に向かいあえるかもしれません。

立場の弱い人を守る対話の場

隠岐 17～18世紀に未分化だった哲学と科学は、かつての啓蒙の時代の末期に分かれました。カントは『純粹理性批判』で、哲学者は理性の立法者であり、数学者や博物学者そして論理学者は理性の芸術家だと述べています。Scientistという語を作ったヒューウェルにとって、科学者はもはや哲学者ではなく、特定の分野で働く専門家でした。フランス革命後、社会は秩序の象徴として専門を持つ科学

初日には、藤井輝夫総長①と韓国SKグループのチェ・テウォン会長②による開会挨拶に続き、潘基文 元国連事務総長③、長谷川真理子 総合研究大学院大学学長④、ポール・アリヴィサトス シカゴ大学学長⑤の3人が基調講演。ハイレバルトークセッションの後、パネルディスカッション1「世界共通価値としてのグローバル・コモンズの責任ある管理」⑥を行いました。2日目には、「世界哲学は世界の諸危機にどう対決するか?」⑦、「持続可能な将来への社会変容に向けて」⑧、「ロボットやAIと歩むこれからの社会はどのような?」⑨、「安全保障と気候変動の複合課題」⑩をテーマに掲げる4つのパネルを行った後、全5パネルの代表と藤井総長による総括セッション⑪を実施。最後に藤井総長とChey Institute for Advanced Studiesのパウ・イングク院長⑫が開会挨拶を述べました。総合司会は前回に続いてNHKアナウンサーの山本美希さんが担当しました。 [アーカイブ動画はこちら](#)



者を必要とし、哲学の役割は弱くなりしました。しかし、20世紀後半に状況が一変し、科学と社会の相互作用で起こる問題において、哲学、特に倫理学の重要性が再認識されました。原発のように、科学なしには扱えないが科学だけでは解決できない問題のためです。福島の事故を経て倫理的評価を科学に埋め込む動きが進み、哲学はいまやあらゆる場で求められています。新しい啓蒙は多様な個人間のコミュニケーションの困難を克服することによってのみ達成できます。バイアスや集団思考の存在を前提に、曖昧で複雑な対話に関わる必要があります。それには、立場の弱い人を守ることを、効果的な対話の場を用意することが重要です。

ガブリエル 科学は政治や経済をも左右します。核兵器や原発も科学の成果物です。哲学と科学がもっと対話すべきなのは明白ですが、原子力をどう扱えばいいかを倫理学が知っているわけではありません。知識のやりとりを通してこそ新しい方向性が見えてきます。人間が動物であるとはどういうことか、世界を理解するとはどういうことであるのかといった問いは、すべて倫理的な問題への回答に貢献します。哲学者は人工知能の研究者や物理学者と協力をすべきです。共通の目的は、人間とは何かを理解することです。かつての啓蒙は人間を合理的動物と捉えましたが、それは正しくありませんでした。必要なのは専門化が進みすぎた諸学を統合することです。学者以外の人も含んで、より大きな社会まで変えていこう

とする取り組みが必要です。それが新しい啓蒙の出発点になります。

有益性に基づく具体的手法を

大栗 かつての啓蒙は成功した、と私は言いたいと思います。限定的ですが確実に問題を解決する具体的手法を提供したからです。しかし解決できない問題も存在します。事実を理解し解釈するとはどういうことなのか。気候変動、原子力の利用など、科学的手法だけでは解決できない問題があります。合意を目指して多様な人々がともに問題に向かうことが重要です。具体的ではっきりした手法を作らないといけません。道徳、リアリズム、普遍性といった視点を取り込むことが必要です。こうした概念を具体的手法に結びつけるにはどうすればいいのか、有益性に基づいて判断する必要があります。

イ 新しい啓蒙は、古い啓蒙が達成したのと同じような成功を収められるのか。私は可能だと思いますが、自問自答を続けなければなりません。今後どのような基盤に基づいて道徳的なリアリズムを考えるべきか。手法の問題も重要です。古い啓蒙では、合理的であることに注目すれば状況を脱却できると皆が合意していましたが、今はそうした合意がありません。過去と比べ、自分と違う意見をうまく扱えるようになってきているのかも疑問です。SNSの時代に、コミュニケーション力は逆に下がっているように見えます。新しい啓蒙を考えるにあたっては、まず何が今足りないかを明確にすべきかもし

れません。

隠岐 皆さんの話に励まされました。対話の可能性に期待しています。多くの分野の人が関わりながら共同の知恵を作り、広い視点で明るい未来を目指すのではないかと感じます。ただ、浮かんだ疑問もあります。人工知能が万有引力の法則を再発見したと聞いて驚きましたが、これは自然現象の理解と言ってよいのでしょうか。理解とは何なのかを考え直す機会だと思います。人間を理解することが重要だと言われましたが、それにはどのような理解が必要でしょうか。一つの理解で満足できるのでしょうか。非常に多様な理解がありえます。人間を理解することは複雑で難しい。新しい啓蒙は、どういう理解が意味あるものなのかという大問題にも取り組まないといけません。

中島 新しい啓蒙を考えると、哲学と科学が作った社会的想像を抜本的に変える必要があります。そのためには、哲学も科学も自らを変容すべきなのです。省察にして反射であるreflectionは互いに撓みあうことですが、哲学と科学は相互に映し出しあうことで、深いところで互いに撓みあう必要があるでしょう。新しい社会的想像をもって人間がともに生きていくことを考えれば、哲学と科学の新しい協働の可能性も広がります。倫理の基盤を考え直すことで、私たちの理解に対する新しい理解も生まれるのです。今日の対話は、哲学と科学の本格的な対話を始めるよい契機となったと思います。

東京大学が創る 50年後の地球

UTokyo Day 2022 「SPRING GX」の学生 7名と総長の座談会より

「株主総会」から発展したイベント「UTokyo Day」。第一回となる今回は、「GX(グリーントランスフォーメーション)～東京大学が創る50年後の地球～」をテーマとして、11月25日にオンラインで開催されました。Race To Zeroの取り組みと財務戦略の紹介に続いて行われた座談会の模様をダイジェストで紹介します。登壇者は、博士課程支援プログラム「SPRING GX」に参加する様々な分野の学生7人と総長です。



UTokyo Dayプログラム

| | |
|-------------------|--|
| 国際的なGXの先導者として | 藤井輝夫 総長 |
| Race To Zero への挑戦 | 大久保達也 理事・副学長 × 菊池康紀 准教授 (未来ビジョン研究センター) |
| GX実現に向けた財務戦略 | 青木志帆 財務経営本部 財務経営マネジメント部 門長 |
| 特別座談会及びQAセッション | モデレーター：大越慎一 教授 (理学系研究科) / SPRING GX 事業統括 |

学生の研究紹介動画の題名

| | |
|---------------------------------------|--------------------|
| 爬虫類の頭骨内部構造と感覚機能の進化に関する生態要因の解明 | 脇水徳之 (理学系研究科) |
| 自然保護と資源利用が両立するメカニズムの解明：コモンスの悲劇を乗り越えて | 宮澤美恵子 (新領域創成科学研究科) |
| 熱力学的観点による細胞の代謝反応解析 | 萩野智大 (医学系研究科) |
| 『源氏物語』の政治世界—家と邸に関して— | 宮内理伽 (人文社会系研究科) |
| クリックケミストリーによって実現する動的微小環境の組織透明化イノベーション | 田村伊織 (工学系研究科) |
| グローバル化がもたらす社会性の拡張とその限界 | 猪又梓 (人文社会系研究科) |
| 社会的総余剰最大化による都市集約政策の最適化 | 和田吉史 (工学系研究科) |

7人の学生が自分の研究をそれぞれ1分強で紹介した動画を放映後、大越先生の司会のもと、総長を交えた特別座談会が行われました。

遠くキリマンジャロからの参加者も

大越 私たちはよりよく地球を管理するための改革を広い意味でGXと捉えています。その文脈において自分の研究がどう位置付けにあるのかについてなど聞いていきたいと思えます。**総長** (学生たちの研究紹介動画を見て) 多様な専門分野を持つ学生さんがSPRING GXに集まっているのだと改めて感じます。人類の営みをどう変えればいいのか、気候危機や生物多様性の喪失といった問題にどう向き合えばいいのか。各分野の専門家の目で見ると、将来社会に出たときにその視点を持ちながら活動することが、東大の目指すGXにつながると思います。50年後の地球をよりよいものにするために何をすればいいのか。その辺りを探りたいです。**宮澤** 私はSPRING GXの海外プログラムでいまタンザニアに来ていて、標高1700mのキリマンジャロの村から参加しています。異なる価値観を持つステークホルダーたちがどのような条件なら合意できるのかに関心があります。キリマンジャロでは、多くの生物学者や生態学者が自然を研究する一方で、人類学の研究者は樹木の下に住む人々を研究し、環境正義の研究者は当地の人権を調べています。各分野で優先順位が違うので研究者たちが合意を形成しにくいという問題を抱えています。世界が抱える気候変動の問題にも通じると感じます。**和田** 私は都市工学を研究しています。今後の政策がどうあるべきか、エビデンスに基づいて考えることが重要だと思います。GXに関する

様々な課題に対してどういう政策が必要なのかまだわかっていません。モデルやシミュレーションを使って数理的に考え、どういった対策が有効なのかを明らかにしていきたいです。

田村 私は化学と生物学をベースに疾患のメカニズムを解明する技術を研究しています。長い目で見たときに、これまで治らなかった病気の人が治るとか、医療費を削減するといったことにつながるものです。GXというとカーボンニュートラルに直結する技術に目が行きがちですが、長い目で見たときに意味を持つ基礎研究に積極的に目を向けるべきだと思います。

大越 長いスケールということであれば、宮内さんは千年前の話を研究していますね。

物語が平安時代の心をつないだ

宮内 感染症の問題は『源氏物語』が書かれた平安時代にもありました。政治不安や感染症流行があり、生が脅かされる時代でした。そうしたなかで人々の心をつないだのは文化を共有すること。様々な階層の人々が『源氏物語』を読むことで心を通わせ、文化的基盤を共有していました。『源氏物語』を受け継ぎ、また次の世代につなぐのが自分の使命かなと思います。

大越 和田さんは都市集約政策を研究しています。将来の都市には何が求められるでしょうか。

和田 いま、人がバラバラに住んでいることで、あちこちが衰退し、そこに住む人の生活が苦しくなっていると思います。人口が減少するなか、ある程度利便性のある場所に人を集めて発展させること、そして持続性のある都市にすること



が大事だと考えています。

大越 一方、社会性の拡張をテーマにしているのが猪又さんです。

猪又 私は社会における意識の変化を考えています。社会の意識は経験的な知識や感覚によって培われてきました。文明が発展して遠隔化・高速化するにつれ、経験が変化しています。いまの技術やその捉え方を観察することで50年後に人間がどう社会を作るのかが見えるのではないかと思います。規模ということでは、経験から離れた世界、意識が実際の自分と乖離する状態というのも生じてくるかもしれません。

総長 「UTokyo Compass」では対話の重要性を強調しました。問いを共有して各々の立場から議論するという事です。様々な専門の人と話すことに価値があります。別の分野の話を聞いて感じる場所があるのではないのでしょうか。

脇水 私は恐竜を使った生物学を研究しています。地球全体を捉えてどうすべきか、私たちの分野からも考えられるはず。たとえば、恐竜とともに生きていた植物を比較して生物が環境変動にどう対応してきたのかわかれば、その知見を現代の都市計画に活かすことができるかもしれません。私たちが扱う鳥の検体には風力発電のプロペラに巻き込まれて死んだものもあります。人類の営みを支える開発において、生物と人がよりよく生活できるやり方を考えることにも貢献したいです。

荻野 別の研究科の人たちが同じ話題について話せる場は非常に貴重だと思います。私の場合、学部時代の6年間、医学、薬学、看護学と3つしか学科がないところにいました。文学の世界なんて想像もつかなかったので、こういう機会に文系の人の話が聞けるのはうれしいです。

宮内 私は歴史学と日本文学の領域横断的な研究をしています。『源氏物語』は恋愛だけでなく社会風刺も含まれます。社会の政治構造を反映させて書くことを、権力闘争の只中にある男性貴族ではなく、受領階層という身分の低い女性たちが担いました。彼女たちの意識を和歌や日記などの文献をもとに解釈しています。

猪又 私の分野は社会学ですが、社会を知るには社会学だけやっても一面的な理解になります。SPRING GXで交流することで社会の知らなかった一面を見ることができ、研究によりフィードバックをもらっていると感じます。

大越 さて、これは視聴者から届いた質問ですが、自分の研究は50年後の地球にどのように

つながるでしょうか。

分野が違うと考える時間軸も違う

宮澤 私の分野は社会科学ですが、キリマンジャロで生物学者や生態学者とともに研究しています。彼らは「この木はあと200年は生きられる」などと言って、200年後を考えています。私はいま住んでいる人を見て、もっと近い将来を考えています。彼らとの対話を通じて複数の時間スケールで考えるのが重要だと思います。

大越 分野が違うと時間軸も違う。おもしろいですね。交流することで時間も含めた課題が見えてきそうです。SPRING GXで支援を受けていることについても一言いただけますか。

荻野 私は医学部を出てすぐに博士課程に入りました。結構レアなケースです。仲間たちが病院勤務になったり就職したりするなかで、自分は親の支援を受けながら研究するという状況に、社会的に遅れているという負い目と焦りを感じていました。支援のおかげで心理的負担が減って研究に専念できるのが非常にありがたいです。

和田 よかったことが二つあります。一つは、アルバイトしなくていいので心理的・肉体的な負荷が減ったこと。もう一つは、研究についてより幅広く考えられるようになったことです。SPRING GXの研究費支援により自分の研究テーマをより幅広く追求できるようになりました。

大越 自分自身を含め、50年後の地球に生きる人に向けてメッセージをいただけますか。

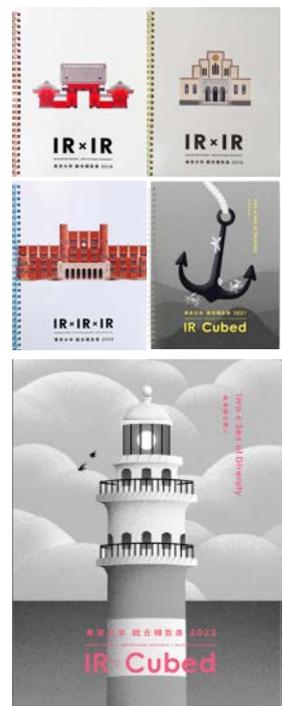
宮澤 50年後はもう少しプレッシャーが少ない社会になることを願っています。私は既婚で子供もいるのですが、フィールドワークに出るのが結構大変で、周りから批判を受けることもあります。もっと多様性のある社会にするため、自分も貢献したいと思います。

荻野 博士課程の学生は基本的には知的好奇心の塊だと思います。「なんで？」という疑問に常に立ち向かえる人であってほしい、と50年後の自分に言いたいです。

総長 皆さんは東大の多様な知のアドバンテージを活用してくれていると思います。学問の違いによる視点の多様性は今日も感じられました。SPRING GXは世界の公共性への奉仕という東大憲章の掲げるミッションにつながる取り組みだと思っています。今日のような対話を続けることが、50年後の地球をよりよいものにするへの道標につながるはず。プログラムを今後も活性化していきましょう。

「UTokyo Day」とは？

●学外有識者と本学教職員との意見交換から大学経営のヒントを得ることを目的に、2015年から毎年行ってきた「株主総会」が、今年度から形を変えて新しいイベント「UTokyo Day」となりました。●UTokyo Dayは、広い意味での東京大学のサポーターを増やすことを目的とし、東京大学が行う新しい取り組みや方向性、そして東京大学がデザインした自らの実践を紹介し、あるべき未来像を、対話を通してともに創り上げるためのイベントです。●研究や教育、社会連携の情報と財務情報を、組織のビジョンと結びつけてお示しすることで、組織の社会価値(存続価値)と、経済価値(存続能力)の双方を報告し、社会からの支持(共感)と資金提供者の支持(信頼)を獲得するための統合報告書をお披露目する場でもあります。●当日の録画映像をオンデマンド配信しています。下のQRコードからご覧ください。



東大の「見えない価値」をお届けする統合報告書は今回で5作目。「UTokyo Compass」を軸に、多様で卓越した「知」を持つ東大が、どのような戦略で価値を生み、未来社会に貢献していくかを一つのストーリーとして伝えます。





海と希望の学校 in 三陸

第23回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センターを舞台に、社会科学研究所とタッグを組んで行う地域連携プロジェクト——海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。5年目を迎え、活動はさらに展開していきます。

「海と希望の学園祭 in Kamaishi」開催

大気海洋研究所附属国際・地域連携研究センター
地域連携研究部門(大槌研究拠点)准教授

北川貴士



今年度、最終年度を迎えている「海と希望の学校 in 三陸」ですが、新型コロナウイルス感染症拡大の問題が発生して以来、控えめな活動を余儀なくされました。最近になって、本事業をともにやっている社会科学研究所(社研)の先生方がようやく釜石に来ることが可能になったこともあり、今後の活動の景気づけにと、玄田有史・社研所長の声がかけて急遽「海と希望の学園祭 in Kamaishi」を行うことになりました。



11月5日(土)、6日(日)に釜石市が主催、大気海洋研究所(大海研)・社研・先端科学技術研究センター(杉山正和・所長)が後援で、釜石情報交流センター・釜石市民ホール「TETTO」で行いました。5日は、野田武則・釜石市長、河村知彦・大海研所長挨拶のあと、3研究所・所長による講演を行いました。その後、河東英直・かまいしDMC代表取締役にも加わっていただき、「海と希望のまち釜石」と題し、パネル・ディスカッションを行いました(写真1)。昼食時には宮古市立重茂中学校の生徒も駆けつけ、郷土芸能(鶏舞・剣舞・鮎埼太鼓)を披露してくれました(写真2)。

翌日の6日は、近年、社会問題化している海洋プラスチックごみ問題を扱った映画「プラスチックの海」(2016年公開)の上映会を皮切りに、沿岸地域で生じている社会的課題をビジネスとして解決す



写真2: 宮古市立重茂中学校による郷土芸能(鮎埼太鼓)



写真1: パネル・ディスカッション(左から、玄田・社研所長、野田・釜石市長、河村・大海研所長、杉山・先端研所長、河東・かまいしDMC代表取締役)

る取り組みを紹介するトーク・イベント「海と希望のソーシャルビジネス(中村寛樹・社研准教授ほか)」のほか、学術講演(宇野重規・社研教授「民主主義は海から生まれた」、佐藤克文・大海研教授「バイオリギングで実現する海洋生物と人の持続可能な共生社会」)を行いました。

バルーン・アート(写真3)で飾られた華やかな会場で、当センターは2日間を通して「希望の缶詰作り」や少し季節外れでしたが「タッチプール」を行いました(写真4)。また、釜石で活動をしている文京学院大学も「海のいきものかんむり作り」などのワークショップを開いてくださいました。大槌町の(株)サ



写真3: 釜石市民ホール「TETTO」に飾られたバルーン・アート(本誌No. 1564表紙も参照)

サキプラスチックによる射的の釣り版「キャスティング体験」は、景品も豪華で子供たちに大人気でした。海上保安庁・釜石海上保安部、海洋研究開発機構、三陸ジオ・パークなどにもブースを設置していただきました。



すでに今年度の予定が決まっていた中で新たに学園祭を行うことは、簡単なことではありませんでした。しかし、多くの人に参加していただいたことに加え、3つの研究所と釜石市をはじめとする多くの異なる組織がもたらす相乗効果で、学園祭は大変賑やかなものになり、盛会裏に終えることができました。来年度以降も続けていくことになりそうです。



写真4: タッチプール「あ〜ちびたっ」



「海と希望の学校 in 三陸」公式 Twitter (@umitokibo)

制作: 大気海洋研究所広報戦略室(内線: 66430)



デジタル万華鏡 第32回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

法政政治学研究所附属近代日本法政史料センター 明治新聞雑誌文庫チーム係長

吉井初巳

時代の「瞬間」を伝える



多様な形態で発行された号外

2022年3月30日に「明治新聞雑誌文庫所蔵新聞号外コレクション」が学術資産アーカイブ化推進室の協力によってオンライン公開されました。明治新聞雑誌文庫所蔵資料のうち、明治期～昭和戦前期の主に一枚物の新聞号外として整理された資料をご覧いただけます。全国紙から地方紙に及ぶ2,000枚以上、発行新聞社は45社を数える号外紙面を、記事タイトルからのキーワード検索、発行年月日から探すことができます。

現在でも身近な存在である新聞の号外は、明治から昭和戦前期、実際の事件や戦争の速報に対して即時発行され、今以上に当時の人々にとって大きな影響力のある情報ツールでした。また、大きさについて、現在は新聞本紙と同サイズのものが一般的ですが、当コレクションの号外は手のひら大の小さなものや色刷りなど、時代や状況によって変化する様々な発行形態のものも集められています。当文庫初代主任でジャーナリストであった宮武外骨が蒐集した、郵便はがきに印刷され購読者へ直接届けられた珍しい号外も含まれます。

日露戦争の頃、購読者獲得のため、新聞社による空前の号外発行競争が全国的に繰り広げられました。戦況が刻々と変化するにつれ、第二号外、第三号外など同じ日に複数回発行されている事例を当コレクションで多く見ることができます。

新聞号外は、劣化しやすく、サイズが多様で扱いに注意が必要とされましたが、今回の公開で閲覧の利便性が飛躍的に高まりました。報道の歴史資料のひとつとして、時代の「瞬間」、熱気を多くの方に感じていただければ幸いです。



宮武外骨が蒐集した郵便はがきの新聞号外

<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/gogai/page/home>

蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives



第41回

収蔵する貴重な学内資料から140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

年史編纂と大学アーカイブズ事始

東京大学は2027年に創設150周年を迎えます。ことし10月には150周年に向けた事業がスタートし、事業推進のシンボルとなるロゴマークも発表されました。

創立100年時を振り返りますと、記念事業のひとつとして『東京大学百年史』の編集・刊行が計画され、「東京大学百年史編集室」(以下、編集室)がその任にあたりました。編集室は、編集事業の過程で収集した大学関係資料を沿革史編纂にとどまらず、学内外で広く活用し、さらには保存と研究を行う組織「大学アーカイブズ」を東京大学に設立しようと早い段階から構想していました。

そこで編集室は、1980年に大学アーカイブズの制度調査と情報収集のため、国内外の大学を対象とするアンケートを実施しました。『学内広報』No.485掲載の



「東大百年史編集室通信」No.33～No.39が収録された『学内広報 昭和55年度』

「東大百年史編集室通信」(以下、編集室通信) No.33では、このアンケートに対して国内79校から回答を得たこと、そのうち大学アーカイブズという名称は持たずとも、大学に関する資料や公文書類を保存する施設が「ある」と回答したのは19校だったことを報告しています。一方、「編集室通信」No.35では、諸外国からの

の反応について「9月16日現在調査総数38カ国、のべ439校のうち20カ国、のべ157校から回答があった」、「これまでのところアーカイヴ〔原文ママ〕が設けられていない回答はわずか10校」と書かれており、海外においてはアーカイブズを



「東大百年史編集室通信」No.35

おかない大学のほうが珍しいといえる状況がうかがえます。編集室が行った事例調査については、その一部が1983年7月発行の『東京大学史紀要』第4号に報告されています(当館サイトに掲載あり)。

そして編集室は、百年史編集事業を終えた1987年4月に「東京大学史料室」として念願の大学アーカイブズを設立し、現在は当館がその役割を継承しています。次の百五十年史編纂事業には当館のどんな資料が活用されるのか楽しみです。

(特任研究員・千代田裕子)

ワタシのおシゴト 第199回

RELAY COLUMN

総括プロジェクト機構 国際建築教育拠点総括寄付
講座 SEKISUI HOUSE - KUMA LAB 特任専門職員 **勝 博子**

唯一無二の研究室と共に

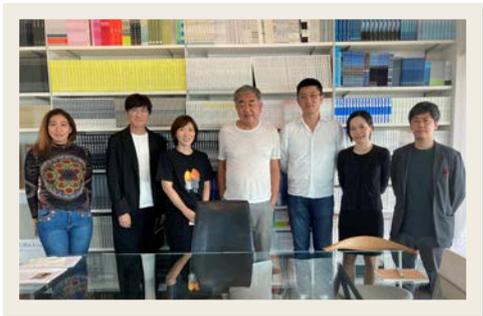


T-BOXに展示してある模型の前で

建築学科の隈研吾研究室を経て、現在はSEKISUI HOUSE - KUMA LABの秘書として、気付けばもう9年以上隈先生とお仕事をしています。私は研究室のアドミニストレーション全般を担当しており、国際的に著名な建築家や講師陣とも直接やりとりをしています。最近は海外の往来が再開したことでイベントなども増え、緊張感が増すとともにますます忙しくなってきました。

工学部1号館4階にある研究室はKUMA LAB設計でとても心地良い空間です。隣には3Dプリンターやレーザー加工機などを揃えたデジタルファブリケーション施設「T-BOX」があります。ここはモノづくりに関わる学生の活気がいつも満ち溢れています。

KUMA LABには他にはないワクワクすることがたくさんあり、新しいアイデアが日々生まれています。そんな研究室をみなさんが大いに活用できるよう全力でサポートしていきたいと思います！



隈先生と研究室スタッフの皆さんと

得意ワザ：早起き！人生で一度も寝坊したことがない
自分の性格：断捨離好き！家族にやりすぎて怒られます
次回執筆のご指名：出水稚子さん
次回執筆との関係：隈研究室つながりです
次回執筆者の紹介：美味しいものに詳しい♡

ぶらり
構内ショップの旅

第10回

サブウェイ@本郷キャンパスの巻

東大店限定「デストロイヤー」

工学部2号館1階に店を構えるサンドイッチチェーン、サブウェイ。コロナ禍の影響で2月に閉店を決めました。惜しむ声が多く寄せられたことから営業を継続することになりました。カウンターにあるメニューでひととき目をくのが、ローストビーフがこれでもかと盛られた「デストロイヤー」。東大店限定のこの

メニュー。全部で4種類あります。通常の2倍のローストビーフ（100g、10～16枚）が挟まれた「デストロイヤー」、3倍の「キングデストロイヤー」、そして4倍の「ゴッドデストロイヤー」。最高峰の「インフィニートデストロイヤー」



店長の松村多輝子さん

には5倍の250g（25枚～35枚）のローストビーフが盛り込まれています。ビジュアル的にもインパクト大のこのメニュー。もともと東大の学生がローストビーフサンドイッチに、追加でローストビーフをトッピングしたことから始まったとか。塩とこしょうで味付けられたローストビーフとわさび醤油の組み合わせは、意外とさっぱりと食べれると話すのは店長の松村多輝子さん。このメニュー目当てに来る人もいます。

通常メニューで人気があるのは、えびアボカドや肉系のもの。最近だと1月17日までの限定メニュー、3種類の具材を贅沢に挟んだイタリアンジェノバクラブとアメリカンBBQクラブが断トツの人気で、お店に来る約半数の人が購入しているそうです。毎朝お店で焼いているパンは4種類から選べます。

そしてサブウェイといえば、カスタマイズ。既存のメニューにてり焼きチキンをトッピングしたり、スパイシーなものに卵を足して味をマイルドにしたり……とメニューが何倍にも膨らみます、と松村さん。「カスタマイズできるというのがサブウェイの魅力です。さまざまな組み合わせを楽しみに、昼休みや授業の合間に来ていただけると嬉しいです」



営業時間●
平日10時～15時
(短縮営業中)
定休日：土日祝

ローストビーフ
が250g盛られた
「インフィニ
ート・デストロ
イヤー」(2,220
円)

<https://www.subway.co.jp/shops/kanto/tokyo/>

インタープリターズ・第184回 バイブル

カブリ数物連携宇宙研究機構教授
科学技術インタープリター養成部門 **横山広美**

専門的助言をどう行うか

多くの構成員が、社会に対して専門的助言を求められる場面に数多く接しているのではないだろうか。専門的助言は必要とする場面や相手によって、同じ内容でも提案の仕方や選ぶ内容が大きく異なる。コミュニティ内、政府の審議会、あるいはメディアに対して、どのように専門知を用いた助言をしていくべきなのか。

アメリカの政治学者ロジャー・ペルキーは、特に政府に対する専門的助言を4つの領域に分けて説明している。中でも、政府が政策をまだ持っていない際に、政策オプションを複数提示する「誠実な斡旋者」が好ましいと考えているようだ。社会がどのオプションを選ぶのかは、専門家ではなく政治側の責任である。

研究者として譲ってはいけないのは、専門知に基づいている助言だろう。そもそも専門家が意見を求められる理由がそこにあるからだ。こうした態度は、時に科学主義だと揶揄されても重要である。同時に政治にはじかれず、かつ適切な専門知をインプットする難しさは並大抵でないであろう。第8波を迎えるCOVID-19（コロナ）でも、難しい状況が続いている。

コロナでは世界共通の科学知が広くオープンになっている。国内でも、一部の研究者たちがいち早く論文データや専門知を元に発信活動を続ける様子は大変心強い。それらのスタイルは、研究者の王道スタイルと言えるであろう。しかし日本の政策、いやそのほか手前の科学的助言がそれに追いついていないケースが散見された。そうした中、こうした科学的不備を指摘する、政府への助言者集団の「外部」にいる専門家たちが活躍した。一例は最初に定着した接触感染の消毒手洗いから、空気感染を重視した換気に重点を置いたギアチェンジの推奨だ。ピルケーの分類では誠実な斡旋者ではなく、むしろ科学主義者に相当するかもしれない。しかも専門領域は必ずしも専門ではない。コミュニティの外からの方がむしろ助言しやすいという現実があるのかもしれない。

筆者の提案は、このような状況においては、専門を同じくする数名以上のグループで提案をすることだ。これを著者は「グループ・ボイス」と呼んでいる。

コロナについてはもともと最初から、政府に助言をする専門家集団の背景に、こうした先端の専門知をサーベイし、エビデンスを揃えるチームが学会のサポートなどを得ながら構成されるべきではなかったのかと感じる次第である。

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp>

ききんの「き」

寄付でつくる東大の未来

第38回

渉外部門
アソシエイト・ディレクター **高橋里沙**

寄付をかつこよく！卒業生本音トーク

10月15日に「東大卒『母校にお世話になってない』ってそれホント!?～東大卒ブランドは「寄付」で守る!～」と題し、母校へ寄付をしている卒業生によるオンライントークイベントを行いました。

ゲストには、朝倉祐介さん（シニフィアン株式会社 共同代表）、小田部幹さん（本学職員）、和家尚希さん（マイクロソフト米国本社）の3名をお招きし、寄付の理由等を伺いながら、「日本や東大の寄付文化」や「2027年に150周年を迎える東大に対する思い」についてお話しいただきました。

経営者である朝倉さんからは、以前はあまり注目されていなかったスタートアップがここ数年かつこいと思われている現状から、「寄付がかつこい」という雰囲気を作っていくことが大事ではないかというご意見をいただきました。また、日本一という理由以外に、具体的にやりたい理由のある大学になってほしい、東大だからこそ日本の教育を変えていけるはずだ、という期待の言葉もいただきました。

在学時からラグビー部OB・OGの多大な恩恵を感じていた小田部さんは、それに対する恩返しとして現役部員への寄付を行っているとのことでした。東大全体に対しての共感が難しくても、小田部さんにとってのラグビー部と同様に個人や研究を見ていくと応援したくなるものがあるはずで、職員としては、自分が職員になった初心を思い返す「ツール」としても寄付は使うことができる、という興味深いお話も伺いました。

和家さんからは、「寄付」という言葉は堅苦しく聞こえるが、日本にはお金で好きなものや人を応援するという感覚は既にあって、そこからみんな楽しく寄付によって応援していく動きになると、より寄付の魅力が増すのではないかと、という示唆に富むご意見をいただきました。また、海外大学への進学等進路の多様化が進む中、優秀な人材を引き付けられるよう、東大にある魅力的な活動をもっと発信してほしいという奨励の言葉もありました。

今回のイベントを通じ、寄付者や卒業生と「対話」を続け、いただいた期待や言葉に応えていくこと、そしてともに東京大学を創り上げていくことが、東京大学がより魅力的で、愛される大学であり続ける一歩になるのではないかと感じました。



↑ オンライン対談の様子
配信動画はこちらから↓

東京大学基金事務局（本部渉外課）
kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp



トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

| 掲載日 | 担当部署・部局 | タイトル (一部省略している場合があります) |
|--------------|---------------------|---|
| 11月10日 | 史料編纂所 | ワークショップ「17-18世紀のインド洋 (パートII)」を開催 |
| 11月10日～12月6日 | 広報室 | なんで一卵性双生児でも違う部分があるの?→加納純子 葉はどうして緑色なの?→寺島一郎 なぜ正三角形は二等辺三角形とは言わない?→広瀬友紀 歳を取るとどうして白髪や薄毛になるの?→西村栄美 現代アートはどうして難しいの?→松井裕美 なぜ海から離れても生きられる魚がいるの?→石川麻乃 なぜ脳から心が生じるの?→池谷裕二 12頭の馬と馬術部員と猫も暮らす三鷹馬場 / 「淡青」45号 |
| 11月11日 | 史料編纂所 | 「幕末維新史研究と井伊家史料」を開催 |
| 11月14日～12月2日 | 広報室 | 東京大学ネットゼロ計画のいま～菊池康紀准教授の巻 地球と生態と人間を軸に環境危機を克服する～沖大幹 気候と社会連携研究機構長の巻 / GX と東大 |
| 11月15日 | 本部学生支援課 | 東京大学運動会のマスコット、イチ公が本郷消防署の一日署長に! |
| 11月15日 | 生産技術研究所 | UTokyoGSCの受講生4名が全国発表会にて文部科学大臣賞等を受賞 |
| 11月17日 | 本部人事企画課 | 「令和4年度東京大学卓越研究員」20名決定 |
| 11月18日 | 本部学生支援課 | ヨット部ディンギー班が第87回全日本学生ヨット選手権大会で総合9位! |
| 11月18日 | 工学系研究科・工学部 | 藤田誠卓越教授が仏国「化学の家財団国際賞」を受賞 |
| 11月21日 | 生産技術研究所 | 岡田恒男名誉教授が瑞宝中綬章を受章 |
| 11月21日 | 生産技術研究所 | 小林敏雄名誉教授が瑞宝中綬章を受章 |
| 11月21日 | 生産技術研究所 | 杉原加織講師が第4回輝く女性研究者賞(ジュニアシダ賞)を受賞 |
| 11月21日 | 情報学環・学際情報学府 生産技術研究所 | 池内克史名誉教授が令和4年秋の叙勲—瑞宝中綬章を受章 |
| 11月24日 | 医科学研究所 | 「第28回東アジアシンポジウム」へ参加 |
| 11月24日 | 広報室 | バイオ医薬のデリバリー技術開発に挑む / Entrepreneurs 16 |
| 11月25日 | 本部広報課 | ウクライナ連帯支援のための桜の記念植樹式を開催 |
| 11月25日 | 総合文化研究科・教養学部 | 合成生物学の世界大会「iGEM」で東大チームがGold Medal受賞 |
| 11月28日 | 総合文化研究科・教養学部 | 進化認知科学研究センター小池進准教授が日本医師会医学研究奨励賞を受賞 |
| 12月1日 | 本部渉外課 | 駒場図書館1Fラウンジの愛称が「Sky Lounge」に決定 |
| 12月2日 | 本部協創企画課 | 第9回Beyond AIサイエンスカフェ(辻晶先生)動画を公開 |

☞ CLOSE UP ウクライナ連帯支援のための桜の記念植樹式を開催 (本部広報課)



秋の小石川植物園に集った皆さん

11月24日、小石川植物園にて、ウクライナ連帯支援 桜の記念植樹式が開催されました。我々と同じ価値観を有するウクライナがロシアからの攻撃と侵略に巻き込まれる中、EU議長国であるチェコ共和国がNPO法人育桜会及び東京大学と協力して実施したもので、心からウクライナと連帯し、ロシアの侵略に対する絶え間ない支援を進める決意を改めて表明するために企画されました。

植樹式には、EU諸国の代表者に加え、海江田万里 衆議院副議長、長浜博行 参議院副

議長、外務省代表者、駐日ウクライナ大使、文京区長にもご出席いただき、尾辻秀久 参議院議長からは挨拶が寄せられました。学ぶ場や研究する場を安全に確保することができなくなった学生及び研究者を一時的に受け入れて教育・研究環境を提供する「学生・研究者の特別受け入れプログラム」で受け入れている方々にもご出席いただきました。

藤井総長ほか主催者及び来賓からの挨拶の後、テープカット及び植樹を終え、参加者全員での記念撮影を行い、植樹式を終えました。

表紙について / 小石川植物園

今号の表紙は小石川植物園(理学系研究科附属植物園)。毎年秋になると温室前のイロハモミジ並木が色づき、紅葉の名所として親しまれています。撮影に行った12月2日は紅葉度がまだ100%ではありませんでした

が、カメラ片手に訪れるお客さんが後を絶ちませんでした。園内の柴田記念館では、日本野鳥の会会員の井上裕由さんが長年植物園に通って撮影した90種の野鳥の写真展を2月26日まで開催中(予約不要)。園内には仲のよさげなフクロウ夫婦もいるなんて知ってました?



井上裕由 写真展

チラシの写真はルリヒタキです!



CLOSE UP 運動会マスコット・イチ公が本郷消防署の一日署長に! (本部学生支援課)



消防演習で指揮をとるイチ公署長

11月10日、東京大学運動会のマスコットキャラクターであるイチ公が、本郷消防署の一日署長を務めました。

区民の方々に秋の火災予防運動を呼び掛けるため、イチ公は一日署長として様々な活動を行いました。まず、本郷消防署で一日署長の任命を受けたあと、東京ガーデンパレスで行われた消防演習に署長として参加しました。消防演習ではイチ公署長指揮のもと、消防隊員が本番さながらのレスキュー活動を行いま

した。その後、仲町通り商店街へと防火パトロールに出掛けました。パトロールでは商店街のお店にチラシを配って回り、お店の方々に火災防止を呼びかけました。

無事一日署長の大役を務めあげたイチ公は、「これからの季節は、空気が乾燥し、火災が発生しやすい時期なので、みんなもおうちや研究室での火事には気を付けてほしいワン!」とコメントしました。これからもイチ公の活躍にご期待ください。



CLOSE UP 国際研究集会「幕末維新史研究と井伊家史料」を開催 (史料編纂所)



4時間半の長丁場であったにもかかわらず、当日は138名もの参加者がありました

10月1日、国際研究集会「幕末維新史研究と井伊家史料」を開催しました。この集会は『大日本維新史料 類纂之部 井伊家史料』(以下『井伊家史料』)の出版が完了したことを記念して企画されました。

『井伊家史料』は、彦根城博物館所蔵の国指定重要文化財「彦根藩井伊家文書」を編纂・出版したものです。彦根30万石を領した井伊家に伝来した文書群であり、井伊直弼大老在任中の文書のほか、藩主家文書、彦根藩政文書など約27,000点の文書が残ります。長らく未公開でしたが、1959年から刊行が開

始された『井伊家文書』によって井伊直弼関係史料が、そして1978年度から彦根市が行った史料調査報告書によってその全体像が、学界・社会に共有されることとなりました。

集会では、本郷恵子所長の挨拶、杉本史子教授による趣旨説明の後、「幕末の幕府政治と井伊直弼」(菊地久 北海学園大学名誉教授)、「幕末期幕府権力をどう見るか」(朴薫 ソウル大学校教授)、「『井伊家史料』編纂と私」(宮地正人 本学名誉教授)、「『井伊家史料』と明治維新」(母利美和 京都女子大学教授)という4つの講演が行われました。



CLOSE UP UTokyoGSC の受講生4名が文科大臣賞等を受賞 (生産技術研究所)



左から、池本さん、田中さん、水谷さん、隅さん。おめでとうございます!

生産技術研究所は、次世代育成オフィスを中心として、社会連携本部、学内14の研究科・センターと連携し、高校生が東大で研究活動を行う「東京大学グローバルサイエンスキャンパス (UTokyoGSC)」を運営しています。グローバルな視点で未来社会をデザインできる科学技術人材を育成するプログラムです。11月6日、科学技術振興機構が主催するグローバルサイエンスキャンパス (GSC) の令和4年度全国受講生研究発表会が開催され、UTokyoGSCの受講生 (高校生) が各賞を受賞しました。「バイオリンのハーモニクス奏

法における倍音の持続現象に関する数理的研究」の田中翔大さんが文部科学大臣賞を受賞し、「炎光光度法を用いたエアロゾル粒子の濃度計測と可視化手法の開発」の水谷紗更さんが審査委員長特別賞を、「秋田の発酵食品やその製造環境に存在する微生物叢のバイオフィオマティクス解析」の池本雄途さんと「胚発生における温度変化が内臓の左右逆位をもたらすしくみ」の隅佑香さんが優秀賞を受賞しました。発表会では、全国の大学で研究する高校生51名が研究発表を行い、日頃の研究活動の成果を披露しました。



CLOSE UP 合成生物学の世界大会で金メダルを受賞 (総合文化研究科・教養学部)



会心の表情で写真に収まるUTokyoチームの皆さん。プロジェクト名は「Optopass」

10月26日~28日にフランス・パリにて開催された合成生物学の世界大会「iGEM」(international Genetically Engineered Machine competition)において、総合文化研究科の若本研究室が支援するUTokyoチームが、Gold Medalを受賞し、Best foundational advance projectとBest modelにノミネートされました。東大チームとしては過去最高の成績です。iGEMにはオンラインも含めて世界45カ国から350以上のチームが参加しました。各チームは合成生物学の技

術を用いて社会課題を解決するプロジェクトを進め、その技術面や社会実装の可能性などで競い合います。iGEM UTokyoのプロジェクトでは「光の順番を使った生物のパスコードシステム」に取り組みました(詳しくはこちら→<https://2022.igem.wiki/utokyo/>)。

本チームでは、東大基金においてプロジェクト基金を立ち上げ、頂戴したご支援のもとに研究活動を行っています。学部生の研究活動の活発化、合成生物学の発展のため、引き続きご支援をよろしくお願いいたします。



市民と歩む科学 ～海岸漂着物への誘い～

「漂着物学会」という会員数300人ほどの学会がある。論文誌を毎年1回発行する学術団体であるが、会員の大半は研究を仕事にしている方々ではない。日ごろ海岸を歩いて、打ち上げられた貝殻、流れ着いた植物の種子などを拾って楽しむビーチコマー (beachcomber) が主体だ。

海岸には多様なものが流れ着く。収集の対象になる美しい貝殻や、島崎藤村作詞の唱歌「椰子の実」にみるような、はるか南方からもたらされるものなど、人によって関心の対象の幅は広い。2021年に海底火山「福徳岡ノ場」が噴火し、大量の軽石が南西諸島をはじめ日本各地の沿岸に流れ着いたことは記憶に新しい。こうしたことも会員の関心の的で、メーリングリスト上では次々に軽石漂着に関する情報が飛び交った。

自然由来のものばかりではなく、国際的にも大きな問題になっている海洋プラスチックごみも多数流れ着く。会員の中には、30年以上も海岸漂着ごみの問題を追ってきた専門家もいて、海洋環境の保全も学会の重要な視点の一つである。

民俗学の巨人柳田國男は、1952年に「海

上の道」を著わし、海を通じて、海流を介して文物が広範囲につながりをもっている可能性を指摘した。浜で拾ったものが、いったいどのようにしてそこに流れ至ったのか、この素朴な疑問をきっかけに、海流の動態や海洋環境、さらには海を介した人間活動の拡大の歴史など、さまざまな科学の視点がひろがっていく。

2022年11月、コロナ禍で中断していた漂着物学会の対面による大会が3年ぶりに開催された。大会中のビーチコーミング (beachcombing) では、見慣れない種子を拾った会員に対して植物の専門家がたちどころにその種類を教示し、外国語に堪能な会員が漂着した海外製品の来歴について推論を展開するなど、そこそこで情報交換を行う姿が見られた。

このところ、「市民参加による科学」の重要性が強調される。海岸漂着物を題材に、市民の方々と文字通り浜を「歩く」ことを通じて科学の原点に立ち返ることは、市民参加型科学そのものといってよいだろう。

道田 豊

(大気海洋研究所)

